**「投稿が少ないとのことですが、この分野の研究者で人気の投稿先について、調査されたことはありますか。ライバルジャーナルの広報方法、運営等などが参考になるのではないかと思います」**

ブリーン 他の学術雑誌の編集の者と交流を持っており、情報交換を行っています。ですから、お互いに知恵を拝借しているつもりでいます。投稿論文の数が少ないと言いましたが、もしかしたら『Japan Review』だけの問題ではないような気がします。とにかく毎年この時期になると、つまり新年になると、果たして1号分の原稿が集まるのかと、もう9年もやっているのに、まあ若干ながら数は増えていっていると思いますが、やはりWeb of Scienceなどに登録しないことにはさらなる知名度、認知度の向上はあんまり期待できないのではないかと思っています。

**「IAB、International Advisory Boardは、全員海外にいる研究者のようですが、理由は何でしょうか。どのぐらい日本人研究者を相手にしているのか、私が投稿者だったら、IABを見てから少しためらいます。**

ブリーン　「それは面白いご質問ですね。どなたのご質問（笑）、でしたでしょうか。なぜに、ためらうでしょうか。その辺を一言言っていただいていいですかね。」

質問者　　「この質問をしたのは、31号と30号のコンテンツをオンラインで拝見すると、投稿者というか、著者は、もう9割以上、外国人のようです。でも内容は、日本学だと思い、この分野ではトップの研究者には日本人が絶対多いと思います。ただこれを見て、英語に対して、何かすごい厳しいなのか、あるいは、実はもう外国人のための雑誌で、日本人の研究者は別にウェルカムではないなのかと感じ、躊躇します。それならいっそ、別の日本語の雑誌に投稿する場合は、採択の可能性が高くなるのではないかとか思いました。」

ブリーン 「なるほど。決して日本人の投稿者を歓迎しないというわけではありません。ただ、英文の学術雑誌ですので、原則として、英語の論文を掲載する。原則としてというか、原理原則は英語の論文を掲載する雑誌です。当然、英語の優れた能力のある日本人の研究者はたくさんいます。彼らからの投稿はもう大歓迎で、実は毎号、日本人からの投稿があります。他方『Japan Review』では、日本語のままで原稿を投稿していただいて、日本語のままで査読に回して、査読を通ったら初めて英訳するとシステムもあり、そのよさもあります。

　　　　　　でも、この『Japan Review』の性格上、母国語が英語の執筆者がどうしても多くなります。日文研には、姉妹編、姉妹雑誌として、日本研究もありますので、そちらのほうに多くの日本人が論文を投稿しているわけですが、でも、ロブレグリオ先生のお話にもあったように、ぜひとも投稿してください（笑）。掲載してもらうには、ネイティブにチェックしてもらったうえで投稿してもらったほうが、当然、審査を通る確立が高くなるので、でも決して歓迎しないわけではありません。」

**「J-STOREや、プロジェクトMUSE、出版元サイトなど、複数のサイトから提供されたら、評価が下がるのではないでしょうか。最近、ダウンロード数を評価に加える場合があります。Web of Scienceのように引用数で評価をするのであればいいのですが、最近、ダウンロード数で論文の評価をする動きがあるので、いろいろ散らしてしまうと、一つ一つのサイトのダウンロード数が小さくなってしまって、評価が下がるからいやだと、教員から言われたことがあって（笑）、どうなのかなと思ったのです。」**

鈴木 そのあたりの問題ですが、例えば今、オルトメトリクスとかそのあたり、ソーシャルネットワーク関係でのアクセスなのか、そういうのも、評価に、そういうのがありますが、まあ、われわれ図書館が、進めているオープンアクセスもありますよね。そうすると、機関リポジトリで提供すると評価が下がるの？という問題になってきますよね。本家のサイトがあるのに、機関リポジトリも登録するの？というのがあるのですが、そこはそんなに影響がないのでないかと。

　　　　　　　EBSCOもそうですが、既にいろいろなところに提供されています。最近はCC BYなものも増えてきています。CC BYが増えるということは、どこに置いてもいいということですよね。ということになりますと、どこから、本家のサイトからアクセスするのが至上主義ではなくなってきているという現状があるかと思います。なので、私個人としては、そこはもう気にしなくてもいいのでないか、それよりも、もっと読んでもらうということが必要なのでないか。可視性というのですかね、いろいろなところに、言葉悪いのですが、下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるという、そこですね。とにかく見せて露出させること、それが重要だと思っています。

男性A 一つ、この問題関連で、これ自分の実際あった経験ですが、論文がジャーナルに出たあとに、それどこに出してもいい、アカデミズムに載せてもいい、SNSで回してもいいという、紙を書いたのですが、最終的にはジャーナルがホームサイト、メインサイトから、評価ちゅうよりも、どれだけヒットがあるのかというのをジャーナルで見たいということで、紙を書かせて、これはもう著作権全部、チョサ（？）に上げておくと言いながら、でも、中央で全体のヒット数を追うていきたいということで、非常に複雑な気持ちになりました。そのジャーナルに載せている人、まあネットワークでもないと集まって、こんなのはどうかという、自分たちでもいろいろなところに出して、いろいろなところで読んでもらいたいという、ですがジャーナルのほうでちゃんとモニターしていきたいということがあったのですね。

鈴木 まずはそういうレトリックスやめたほうがいいというのありますね（笑）。そもそも。ほとんど意味がないから。ダウンロード数でやり、そのうえで、先ほど可視性の話が重要で、たくさんのところにチャンネル出すというのも一つだし、それから特徴を持たせて可視性を上げるというのも一つだし、いずれにしても、見えるようにするということと、ダウンロード数で計るとは違うと思いますよね。だからまず、そこをやめたうえで工夫をする、でも、そこへとらわれてしまうと、結局ダウンロード数を上げればいいのでないか、Scopusにもう見えるのでないかとそういう話だけになってしまうので、もうだからそういう点でアプローチ変えたほうがいいのでないかなって思いますよ、最近ね。その最悪が今、話があった（笑）、オボシ（？）から、先ほど言ったように、それを評価で気遣って（？）しまっているという問題ですよね。そこが一番の問題

**「お話を聞く前に書いたので、既に講演の中で教えていただいた部分が多いのですが、例のところに書かせていただいたように、例えば著者の方だと、それは先ほどの（笑）、話のあとなので微妙ではあるのですが、著者の方からは統計数を知りたいとかいった要望が機関リポジトリ担当者にあります。あと著者の方は、どれぐらい読まれたかとか、見られたかということを、どうも気にされるというコメントをよくいただくので、そういうことに関して、どういうことをされたかを知りたいということと、実際に著者の方や読者の方からは、どういう要望が寄せられることがあるのかということも含めて、お聞きできればと思います。」**

ブリーン ありがとう。私の経験だけの話からも、読者から、今の所、どれだけ読まれているのかとか、そういうお問い合わせなどは一度ももらったことがないのですが、ただ、去年、おととしでしたかね、韓国在住の研究者からは、話が飛びますが、『Japan Review』がEBSCOに登録されていないので、韓国では評価されないと話がありました。いろいろなすったもんだがあったりして（笑）、最初はEBSCOに登録しようと所内（？）で努力しましたが、タイミング的な問題があって、できずに終わってしまったのですが、そういったたぐいのお問い合わせなどが、これから増えると思いますよ。ただ、これまではヒット数だとか、どれだけ読まれているのかとか、そういうお問い合わせをまだ一度もいただいていないです。

　　　　　　　一つ、つけ加えますと、多くの執筆者からは、JSTORに入っているか入っていないか聞かれます。入っています。

**「紙媒体を残すという選択をされた理由をお教えください。お話の中でデジタルに移行していっておられるという話もありましたが、それでもあえて紙媒体を残しておられる、その理由は何なのでしょうか。」**

ブリーン 世代の問題でもあると思います。将来的に、オンラインのみに恐らく移行していくと思いますが、私はとにかく、可視化の話も先にありましたが、新着雑誌のコーナーに『Japan Review』が必ずあると、見える存在として、実質のある存在としておきたいと思っています。ただ、今、2200部も毎号刷っています。その数を大幅に減らす時期も、そろそろ検討し始めたほうがいい気もします。

　　　　　　ロブレグリオ先生から紹介された『Japanese Journal of Religious Studies』は、こういった意味で先駆的で、多分、本はオンデマンドだけにしていると思います。それも一つのモデルでもあるかと思います。ただ、繰り返しになりますが、僕個人は本があっていいように思いますし、まあ自分の好みだから世代の問題でもあるかと思います。

ロブレグリオ 『Eastern Buddhist』でも、そういう話がありました。日文研と同じように、『The Eastern Buddhist』というジャーナルは、大谷大学と東本願寺の国際的な顔です。そして伝統があるので、これから少なくともあと10年間ぐらい、紙媒体で、そして10年間のあとでまた考え直そうと思っています。紙媒体を減らす可能性もありますが、近い内にやめようという気持ちはないです。

鈴木 私は本の立場ですが、紙の本を＊＊＊に出していますが、もちろん私シキュウ（？）入っていないので、オンラインを否定していないのですが、ただ、もう3年前か、2014年の『American journal of scientific psychology』という雑誌に、明らかに紙のものとオンラインのもので教育をした場合、紙のもののほうがConceptual knowledge、概念的知識ですか、Conceptual knowledgeについては定着率がいいという、そういう実験があるのですよね。これは間違いなく。UCLAの学生を300人使ってやった実験らしいのですが、で、私はそれすごく大事だなと思ったのです。つまり、オンラインを否定するわけではないのですが、紙で、身体化される知識があると思うので、紙は要らないという議論だけはやめようねと（笑）、今は思っています。

**「ORCID登録が、国際発信力強化にどのようにつながるのか、もう少し詳しく教えてください。冨岡さんへの質問が出ています。」**

冨岡 ORCIDがどうして国際価値につながるという部分ですが、ORCIDは、ORCIDいわく、登記のハブだと言っています。ORCIDが中心というか、つながりの中心となって、いろいろなシステムに、デジタルに情報を出していく、情報の流通をよくしていくということができるようになっています。ということで、ORCIDに登録、例えば論文情報を登録しておくと、ほかのシステムから自動的に取っていってくれる。例えば、今、リサーチマップをORCIDからデータを取ってこれるようになっています。なので、うまく歯車が回り出すと、1回入力するというか、論文を投稿するだけでいろいろなシステムにデータを持っていってくれます。

　　　　　　出版社から出ているような論文、普通のジャーナルだと、既にORCIDに登録する道筋があります。先ほど説明しましたように、CrossRefのDOIを使って、自動的にORCIDに登録してくれます。ただ、紀要の場合は、学内的というか、そういう大手の出版社から出るわけではないので、誰がORCIDに自動登録してくれた、まあ自分が自分本人以外は誰がやってくれるかというと、大学しかないのですね。つまりリポジトリから登録するしか、自動登録の道はないということで、KURENAIのほうでその登録のみ（？）流れを作ると。そう考えています。

　　　　　　それから、先ほど説明しましたように、とにかくORCIDのメンバーになったときに、京都大学としてはORCIDから何をもらうという、そういう考えではなくて、ORCIDにデータを何を登録するか、何を提供してあげるかで、今後のつながりという部分に生かしていきたいと考えています。

**「ORCIDについてですが、私は人文系ではなく自然科学系なのですが、アメリカの地球惑星地学連合ですと、ORCIDをつけさせないと学会に投稿できないという流れにしようかという動きがあります。要は、情報集約をどんどんすることによって、アメリカの地学連合がよりプレゼンスを上げるということだと思います。ということは、逆にいうと大学側も研究者に義務として与えるという方法も一つの手ですね。そういった動きというのは今後考えられるでしょうか。」**

冨岡 いわゆるマンデイク（？）って部分だと思いますが、あくまで、私ORCIDの人間ではないのですが、ORCIDの立場としては、オーサーファーストです。とにかく研究者、リサーチャーファーストで、その研究者の方が、まず自分で自らORCIDのIDを取得して、それから第三者、大学のとか出版社とかに権限を与える、そういう部分が重要になってきます。その情報を登録した情報を公開する、しないというのはすべて研究者が決める、その個人が決めるという仕組みになっていますので、まあ多分、大学の執行部としては、義務化したいなというところは多分絶対出てくると思いますが、あくまでもORCIDはリサーチャーが主体だということです。

**「日本学の中で番有名な雑誌　*Japanese Journal of Religious Studies* や*Monumenta Nipponica*では、とても魅力的な編集がずっと長く勤めて、その編集者はジャーナルの魂ではないかって思っています。ロブリグレオ先生もブリーン先生も研究者でいらっしゃり、編集だけが専門というわけではおられませんが、新しく編集長になられたときは、色々と問題が出てくるのでは羽化と思いましたが、うまくいかれましたか。どれぐらいネットワーク、査読者とか編集者のお知り合いや同僚といったネットワークをおもちになっていましたか、またそうしたネットワークを引き継げれましたか。また、お辞めになるときは、誰にそれを伝えるのか、またそれはどれほど難しいのか、ご意見を聞きたいと思います。」**

ブリーン ありがとうございます。全く編者としても素人だったので、着任したときはすべてが出たとこ勝負いう感じで、今でも暗中模索的な側面もありますが、International Advisory Boardのメンバーに依存するというか、彼らの知恵を借りて何とか切り抜けてきたという感じです。IABの構成は、世界各地でさまざまな分野、また年齢、ジェンダーなどバランスの取れた国際研究者にしているつもりです。まずは、彼らをベースに、彼らのネットワーク、彼らの人脈も利用してきたわけです。

　　　　　　私はあと3年で定年になって辞めますが、そのときに恐らく『Japan Review』の過去を振り返ってみると、編集長が変わると社風ではないのですが、雑誌のありようというか、体裁も含めて変わるので、それはすごくとてもいいことで、継続性、雑誌をよりよいものにしていくうえでは継続性が非常に大事だと思います。2年で交代していくのだったら、アイデアを出すだけの恐らく元気がわかないでしょうし、どうせ2年で辞めてしまうということも考えると思うので、日文研の『Japan Review』の編集体制で本当にすごくいいと思うのは、継続性です。次の後任は誰なのか、どうやって引き継いでもらうのか、まだわからないですが。

ロブレグリオ 私は去年の8月からEastern Buddhistの編集長をしていますが、実は、私が編集者になる前、3年間ぐらいはマネジングエディターが全然いなかったのです。なので私にネットワークをくれる方はいなかったのです。京都弁で言うと、えらいこっちゃ。今、本当に素人ですから、大学の時からの友達たちやブリーン先生に頼っています。今週、南山大学にもいく予定です。編集者についての本などいろいろと読みまして、このような編集者ネットワークのセミナーに入っていろいろと頑張っています。

バデノック　東南アジア地域研究研究所の『Southeast Asian Studies』というジャーナルのエディターとして、いろいろ今日のお話を大変興味深く聞かせていただきました。大変勉強になりました。

このジャーナルの知名度を上げる、認識度を上げる、発信力、国際的な発信力を強化するということを考えるときに、こうやって近くにいる人たちで集まって情報交換や意見交換をし、経験者の方や新しく編集委員になられた方も一緒になって話をするのは非常に意味があると思います。ですが、国際発信力ということで、ここから日本のジャーナルをどうやって国際的なものにしていくかという問題は、日本から考えていくということはある意味では自然なことかと思いますが、民間企業的に考えてみて、ジャーナルはみんな自分たちの競争相手であり、市場をどこまで把握しているのかということをよく自分の委員会でも話しています。

国際化を考えるときには、もう日本でこの近く、皆さんでできること以上にアジアにいますから、こういった問題、国際化、どうやって発信力を上げていくかというのは、毎日皆さん自分の仕事の中ですごく東南アジア研究所的な問題なのか、京大的な問題なのか、関西的なもの、日本的な問題、どこまで日本的なのかというのは、これは中国、韓国、台湾とか見たらみんなおんなじような問題に向かえているとは思いますよね。

言葉の問題もそうですし、論文の数を増やしていきながら、質を上げていくという今日お話にあったような大変難しい質問がたくさんあるのですが、もう少し広く見て、国際的な国際化を考えるような方法を探すほうがいいのでないかと思います。もっと大学でできることとして考えられるのは、例えばケーススタディをアジアでいろいろな分野、自然でもいいし文系でもいいし、いろいろな国ではどういうことをやっているか。まさに今日、お話しいただいた話をもう広く、だいぶ広くいろいろなところで情報を集めて分析して、それをまた議論のネタにしたらいいのでないかと思いました。

まず日常的にお互いのリソースをどう分かち合えるか、ということは非常に重要ですが、将来を考えるときにはオプションとして何が考えれる。今日のブリーン先生のイノベーションは非常に面白かったのですが、ほかにもいろいろなところでいろいろな状況の中で、いろいろなことをされていると思いますよね。そういうところをグローバルな、あるいはリージョナルな地域で多様な知見が得られるようにするのは大事ではないかと考えます。今回のように割と多様で小さい親密な話から一段とスケールを上げて、もっともっと多様なイノベーション、いろいろな問題に対する考え方などを取り入れることができたら、もっと広い世界が見えて、いろいろな解決方法があるのではないかと思っています。

神谷 われわれURAという立場は、このような教員の要望やその他、社会の要望、それからファンディングエージェンシーの要望、あるいはそれに対するわれわれの要望を右から左へ動かす、上から下へ、下から上へ動かす、そういうような仕事です。この紀要の研究会も一番最初、構想をわれわれのほうにまずご相談いただきまして、それではこういう会を持ったらいいのでないか、そのためにはこういうお金を取っていけばいいのでないかということで、過去1年ぐらい、それからわれわれ、とりわけ人文系担当のURAの立場として支援いたしております。今後ともこのような研究会ないしは取り組みについて、われわれとしても連絡係的なかたちになりますが協力をしていきたいと思っていますし、その際本日ご出席いただいた先生方、それからご参加いただいた方々とも適宜情報を取り合いまして、紀要及び学術誌の発展について議論を重ねていくことができればと思います。本日は長い間どうもおつかれさまでした。ありがとうございました。